

1. 研究テーマの設定にあたって

研究テーマ

説明文の構成をつかみ、内容を正確に読み取る力・表現する力を養う

本校では2010年度から2013年度までの4年間、算数科『学ぶ楽しさを味わい、確かな学力を身につける算数活動の在り方』というテーマで研究に取り組んできた。

初年度は「算数」の基礎・基本を中心に据え、基礎学力の定着に取り組み、2年目は、筋道を立てて考えるための手立てとして「図・表」などを使える児童の育成を目指して研究を行った。3年目は、グループでの話し合いの中から算数科における言語活動を中心とした授業づくりに取り組み、4年目はそれまでの3年間の集大成として、思考力を育てる授業・指導方法についての研究を進めてきた。

その結果、4年間で「算数科」の基礎・基本および文章問題などの解決において児童には一定の成果を得ることができた。また、理解を深めるための具体物や掲示物の工夫や基礎・基本を定着させるための100マス計算や単元ごとの小テスト、自分の考えを整理し、思考力を育むための3人組での話し合いなど、さまざまな取り組みを行い、研究を深めることができた。

4年間の研究を通して、算数的思考はある程度身につけさせることができたが、継続して「思考力を育てる学習活動」を進めていく中で、さらなる思考力を育むためには、国語力を高め、言語活動の充実を図っていく必要があると考えた。そこで、次年度（2014年度）からは説明的な文章の指導において、「言葉や表現・文章構成」をおさえながら教材文や他の文章を読む活動を積極的に取り入れ、読んだことをもとにして話し合ったり、教材文をもとに文章を書いたりするなどの言語活動を積極的に行っていくこととした。また、こうした活動を通して培った論理的な思考力・表現力は、国語科だけでなく他教科や総合的な学習の時間、日常生活の中でも活用できる大切な力となり得るはずであり、「説明文の構造を知り、内容を正確に読み取る力を養う」という新しい研究テーマの設定に至った。

初年度（2014年度）の研究を振り返ってみると、研究対象の教科およびテーマを変更したこともあり、研究テーマの捉え方や指導方法などにおいて、共通理解が図られないまま、各学年で試行錯誤しながら研究に取り組んだ。しかし、同じ「説明文」という文章でも、学年の発達段階や教材によって、多種多様なアプローチ方法があることを知り、実際の指導場面を見ることができたことは収穫のひとつであった。ただ、次年度に向けては、今年度の研究過程で明らかになった課題の克服に向けて取り組んでいく必要があり、学年間の系統性を図ることに重きを置き、説明文の読解における「学年ごとに習得させたい力」を明確にしたうえで、その達成に向けて、全職員の共通理解のもと、研究を推し進めていかなければならないと考えた。

2年目となる2015年度からは、「ことばフレンズ豊中」言語力向上推進事業（3年間）の指定を受け、昨年度の研究を踏まえて「説明文の構造を知り、内容を正確に読み取る力を養う」という引き続きのテーマで、大阪教育大学の住田勝教授の助言及び指導を受けながら研究を進めた。住田教授の助言の元、

教材文の分析、教材の捉え方や授業展開における具体的な「手立て」についての研究を深めることができた。また、授業者の教材研究への意識、取り組み方法を細部にわたって指導していただいたことで、授業内容・授業展開・指導する上での発問等で大きな成果が得られた。それ以外にも、ひとりひとりの教師の教材への向き合い方、学年集団や学校全体でさらに昇華させていくことで、子どもたちが授業内でのさまざまな活動に意欲的に取り組んだり、これまで以上に、文章を意識して読んだりする姿が見られるようになった。

教材文の読みでは「序論（はじめ）－本論（なか）－結論（おわり）」といった文章構造を理解することで、その後の別教材に取り組む際にも、以前に学習した文章と同じ構造になっていることに気づきながら読み進めていく児童や単に書かれている内容を読み取るだけでなく、習得した文章構造を用いて文章を書こうとする児童の姿も見られた。こうした部分は、研究を継続し、積み重ねてきた成果であろう。

さらに、研究対象の教科やテーマを引き継いだことにより、全体での共通理解が生まれ、各学年での取り組みが相互に結びついた研究を進められるようになり、一体感が生まれ、昨年度から目指してきた学年間の「系統性」を構築するという素地がつくられた。また、「国語科 説明文における各学年の習得事項」についてもまとめることができ、教師間でのアンケートを取った結果を基に、次年度は教師一人一人の力量を高めていくことはもちろん、教育力を向上させ、組織的に課題解決を図っていく必要があると考えた。

これまでの研究を踏まえ、新学習指導要領においても、「基礎的・基本的な知識や技能の確実な習得、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の育成、主体的に学習に取り組む態度の育成」の重要性が明記されていることを踏まえ、本校児童の実態を考えてみたところ、児童は、全体的に意欲的で、与えられたことや、指示されたことに対しては真面目に取り組む姿が見られた。しかし、自ら進んで学習したり、活動したりする姿勢はまだまだ十分とは言えず、自分の思いや考えを話したり発表したりすることが苦手な児童が多く、国語科では「読み取る力」や「自分の考えや思いを書く力」、基礎的・基本的な知識・技能は概ね身につけているが、思考力・判断力・表現力等の力が弱いことが明らかとなっている。特に、考えの根拠や筋道を明らかにして表現すること、物事を多様な観点から考察する力や複数の情報をリンクさせて考察する力に課題があった。これらのことから、学習課題に対して自分の考えをもち、それをもとにして、その根拠や筋道を明確にして表現することで、相手に分かりやすく伝え、主体的に課題解決することのできる児童を育てたいと考えた。

3年目となる2016年度は、研究テーマに「表現する力」という文言を付け加え、説明文の学習を通して自分たちが読み取ったことや本文の中にある文型や表現を使いながら、自ら説明する文を書くことにも取り組んだ。また、年度途中から研究協力者として、大阪大学の加藤郁夫先生からご指導を頂きながら研究を進め、これまで継続的に実践してきた「話し合い活動」も子どもたち同士で安心感をもって意見を述べ、考えを共有し、深める場として定着してきた。形式的に漠然と話し合うのではなく、個々の児童の考えを事前に確認したうえでメンバー編成を行い、話し合う目的を明確にし、それぞれに役割をもたせ、全員が意欲的に話し合いに参加できる環境を設定し、学習活動を進めることができた。

また、これまでの研究成果として、「各学年の研究の流れと教材一覧」では、各学年が1年間に取り組んできたさまざまな説明文教材を整理し、各学年、学期ごとにひとつずつ指導案をデータ化するなど、さまざまな資料を作成することができた。来年度以降、授業実践や教材研究を行う際の参考にしてもらうこと、「話し合いスキル 学年別習得事項」は、これまで学年ごとに指導してきた事柄を系統立てるこ

とにより、学年間のつながりをもたせ、効果的な指導に生かすことを目的として作成した。最後に、「説明文 学年別 身につけさせたいスキル」については、実際に子どもたちにどのくらい身につけているかを検証することが重要であると考え、習得状況を客観的に見るための「到達度テスト」を実施した。

今年度（2017年度）、本校での国語科研究も4年目を迎えた。これまでの3年間の研究を振り返って、さまざまな成果や課題についての分析を行い、今年度、子どもたちに身につけさせたい能力を学年ごとに明確にし、それを重点目標として掲げ、その実現に向けた取り組みを進めていくことを全体で確認した。また、研究テーマについても見直し、これまでの研究成果として、子どもたちの説明文の構成についての理解が深まってきたことを受け、昨年度までは「説明文の構成を知り〜」としていた部分を、今年度は「説明文の構成をつかみ〜」と一部変更し、研究をスタートさせた。

今年度、学年ごとの身につけさせたい力については、以下のとおりである。

1年生：様々な形の説明文を読み取る力。

2年生：構成を考えながら、文章を書く力。

3年生：児童自らが説明文の構成を整理して論理的に文章を組み立てる力・分かりやすく自らの考えや思いを表現する力

4年生：自分の意見や思いを相手に明確に伝える力・自分の意見と他者の意見を比較しながら聞き、える力。

5年生：書かれた文章や目にした情報について、その内容や伝え方に着目し、自分の考えを理論的に発信していく力。

6年生：自分の考えを構成し、発信することで、自分の考えを工夫して伝える力。

2. 研究報告

I. 1年目（2014年度）～3年目（2016年度）の研究の総括

【1年目（2014年度）】

研究テーマ：説明文の構造を知り、内容を正確に読み取る力を養う

研究授業	1年生：いろいろなふね（東京書籍） 2年生：ビーバーの大工事（東京書籍） 3年生：人をつつむ形（東京書籍） 4年生：アップとルーズで伝える（光村図書） 5年生：テレビとの付き合い方（東京書籍） 6年生：イースター島にはなぜ森林がないのか（東京書籍）
成果	・全学年全クラスでの研究授業を行うことにより、同じ「説明文」であっても、学年の発達段階や教材による多種多様なアプローチ方法があることが分かった。
課題	・学年間の系統性を確立する必要性 ・学年ごとに習得すべき能力の明確化と指導法 ・「文章構成図」を書くことができる子ども ・目的に合った ICT 機器の効果的な使用 ⇒ 「ICT研究部」の創設

【2年目（2015年度）】

研究テーマ：説明文の構造を知り、内容を正確に読み取る力を養う

研究授業	1年生：どうぶつのはな（東京書籍） 2年生：あなのやくわり（東京書籍） 3年生：ありの行列（光村図書） 4年生：ヤドカリとイソギンチャク（東京書籍） 5年生：千年の釘にいどむ（光村図書） 6年生：平和のとりでを築く（光村図書）
成果	・研究協力者からの助言 教材文の分析方法や授業展開における具体的な「手立て」 ・文章構造の理解 「序論（はじめ）－本論（なか）－結論（おわり）」 ⇒ 習得した文章構造を用いて文章を書こうとする児童 ・学年間の「系統性」の構築 ・資料「国語科 説明文における各学年の習得事項」の作成

課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いや考えを話したり発表したりする力 (思考力・判断力・表現力) ・考えの根拠や筋道を明らかにして表現する力 ・物事を多様な観点から考察する力 ・I C T機器や図書館の効果的な活用
-----	--

【3年目（2016年度）】

研究テーマ：説明文の構造を知り、内容を正確に読み取る力・表現する力を養う



説明文の学習を通して自分たちが読み取ったことや本文の中にある文型や表現を使いながら、自ら説明する文を書く。

研究授業	1年生：くちばし（光村図書 上巻） 2年生：サケが大きくなるまで（教育出版 下巻） 3年生：すがたをかえる大豆（光村図書 下巻） 4年生：ウミガメのいのちをつなぐ（教育出版 下巻） 5年生：動物のことば 人間のことば（三省堂） 6年生：平和のとりでを築く（光村図書）
成 果	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合い活動の充実・活性化 (メンバー編成・話し合う目的の明確化・役割分担) ・「I C T研究部」2年目・・・研究授業 ・資料「各学年の研究の流れと教材一覧」の作成 ⇒ 指導案のデータ蓄積 ・資料「話し合いスキル 学年別習得事項」の作成 ・資料「説明文 学年別 身につけたいスキル」の作成 ⇒ 「到達度テスト」の実施
課 題	<u>育成すべき資質・能力</u> 1年生：様々な形の説明文を読み取る力。 2年生：構成を考えながら文章を書く力。 3年生：児童自らが説明文の構成を整理して論理的に文章を組み立てる力・分かりやすく自らの考えや思いを表現する力 4年生：自分の意見や思いを相手に明確に伝える力・自分の意見と他者の意見を比較しながら聞き、考える力。 5年生：書かれた文章や目にした情報について、その内容や伝え方に着目し、自分の考えを理論的に発信していく力。 6年生：自分の考えを構成し、発信することで、自分の考えを工夫して伝える態度。

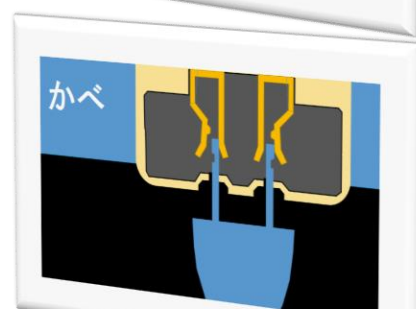
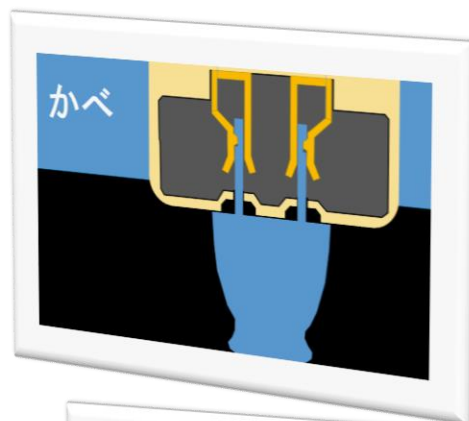
○「ICT研究部」の取り組み

ICT機器として小学校にPCが導入されてからかなりの年月が経ち、最近では、デジタル教科書やネットに上げられた教材が充実し、それらを利用して授業を展開できるようになってきた。本校でも授業に使うようになってきたが、これまではそれぞれにコンテンツを利用したり教材を作成したりしているにとどまっていた。よい教材であれば共有し、そうでなければそれをさらに発展させるようにと、2015年度からICT教育研究を進めることとした。

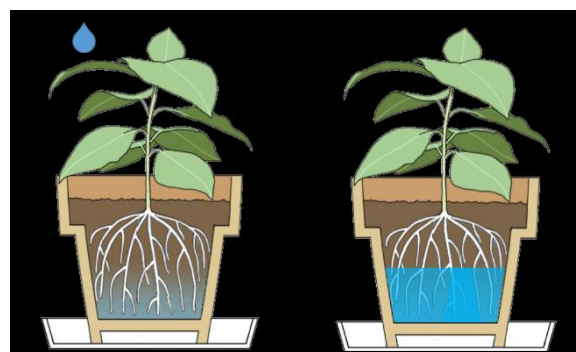
デジタル教材の利点は視覚に訴えた効果的な授業の展開ができること、データの蓄積による教材研究の効率化に大別できる。ICTの活用は児童にとって授業内容をイメージしやすくなり、考えるためのきっかけをより鮮明にさせることができた。また学習内容を深めるために活用することで深化がよりいっそう図られることも感じられた。一方、教材研究の効率化という点では、この年度ではPDCAのDまで進んだといえる。2016年度はCA、つまり検証と修正を充実させ、次のPにつなげる研究へと進んだ。

国語科の研究の傍ら、ICT研究部では「自ら学ぶ楽しさやわかる喜びを味わわせる学習指導 ～ICTを活用して学習を深める～」という研究テーマをもって全学級で授業公開を行った。さまざまな教科でどのような活用方法があるかを模索し、ICT活用の可能性や非ICTとの連携ができるよう、それぞれの学年で教科や手法が重ならないように取り組んだ。授業を観察している限りでは、児童が集中して学ぶ姿や、1時間の中で学びが深まっている様子を確認することができた。

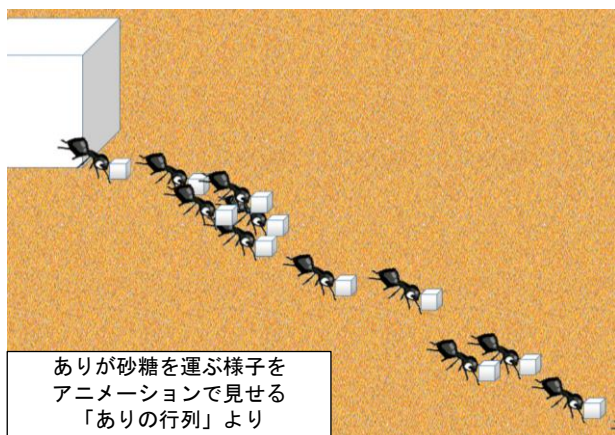
理解に時間がかかる児童にとって、ICT機器が映し出すものは大きな手助けとなった。言葉だけではイメージできなかったものが、目の前にある。それが教員からの言葉と結びついて、理解できるようになる。わかる喜びが次の課題への意欲となり、自ら集中しようとする。どの学年でもテーマに沿った児童の姿が見られたのは大きな成果であった。



コンセント内のプラグの様子をアニメーションで見せる「あなのやくわり」より



植木鉢の内部の様子をアニメーションで見せる「あなのやくわり」より



ありが砂糖を運ぶ様子をアニメーションで見せる「ありの行列」より

「ICTを国語に活用すると読み取る力を阻害することにならないか。」そう思われる人もいるだろう。しかし、どの説明文にも写真や挿絵があるように、読み手の理解をフォローする図画は必要である。特に、理解に時間がかかる児童が、ICTを活用することで仲間とともに主体的に関わり、学びを深める機会として大いに効果があるといえるのである。

Ⅱ. 3年間の研究を振り返って ～ 到達点と課題 ～

初年度（2014年度）は、研究テーマの捉え方や指導方法などにおいて、共通理解が図られないまま、各学年で試行錯誤しながら研究に取り組んだ。その中で、同じ「説明文」という文章でも、学年の発達段階や教材によって、多種多様なアプローチ方法があることを知り、実際の指導場面を見ることができたことは成果のひとつといえるだろう。その一方、課題も多く存在することが分かった。

- ・ 学年ごとに習得すべき能力があり、それを共通理解したうえで、指導していくことが大切。
- ・ 「文章構成図」を書くことのできる子どもを育てていかなければならない。
- ・ 学年が上がるにつれて、子どもの成長が確認できるような研究を進めていかなければならない。
- ・ 説明文においては、子どもの思考をより深める目的で、図や映像を活用していくことも大切。その際、目的に合った ICT 機器を選び、効果的に用いるようにする。

このように課題が山積しており、さらに、研究テーマを設定するに当たって、その大きな目的のひとつであった、子どもたちに「論理的な思考力や表現力を身につけさせる」ことが十分に達成されたかという点においてもまだまだ不十分であると言わざるを得なかった。

そこで、次年度は、今年度の研究過程で明らかになった課題の克服に向けて取り組んでいく必要があり、研究教科は引き続き国語とし、研究テーマについては、学年間の系統性を図ることに重きを置き、説明文の読解における「学年ごとに習得させたい力」を明確にしたうえで、その達成に向けて、全職員の共通理解のもと、研究を推し進めていかなければならないと考えた。

さらに、次年度への展望として、夏季休業中の期間などを利用して、各学年の研究授業に向けた取り組みについて、全体で検討する機会を設けたいと考え、具体的には、各学年の児童の発達段階や実態を踏まえ、子どもたちに身につけさせたい力の育成に適した教材選び・指導計画づくり・本時の展開の構想などを当該学年だけではなく、他の学年の教師も交え、確認・助言することを大切にしたい。そうすることにより、研究授業がより良いものになるだけでなく、単元全体の理解が深まり、その成果が子どもたちに還元されることにつながる。また、系統性を重視するうえでも、他学年の研究を知り、ともに考えていくことは、非常に有意義なものになるはずである。

そして迎えた研究2年目（2015年度）。昨年度の研究を踏まえ、「説明文の構造を知り、内容を正確に読み取る力を養う」という引き続きのテーマで、大阪教育大学の住田教授から助言及び指導を受け研究を進めた。住田教授の助言の元、教材文の分析、教材の捉え方や授業展開における具体的な「手立て」についての研究を深めることができた。また、授業者の教材研究への意識、取り組み方法を細部にわたって指導していただいたことで、昨年度よりさら授業内容・授業展開・指導する上での発問等に大きな成果が得られた。

そして、ひとりひとりの教師の教材への向き合い方、学年集団や学校全体でさらに昇華させていくことで、子どもたちが授業内でのさまざまな活動に意欲的に取り組んだり、これまで以上に、文章を意識して読んだりする姿が見られるようになった。

教材文の読みでは「序論（はじめ）－本論（なか）－結論（おわり）」といった文章構造を理解することで、その後の別教材に取り組む際にも、以前に学習した文章と同じ構造になっていることに気づきな

がら読み進めていく児童や単に書かれている内容を読み取るだけでなく、習得した文章構造を用いて文章を書こうとする児童の姿も見られた。こうした部分は、研究を継続し、積み重ねてきた成果であろう。

さらに、研究対象の教科やテーマを引き継いだことにより、全体での共通理解が生まれ、各学年での取り組みが相互に結びついた研究を進められるようになり、一体感が生まれ、昨年度から目指してきた学年間の「系統性」を構築するという素地がつくられてきたように感じる。また、これも昨年度の目標であった「国語科 説明文における各学年の習得事項」についてもまとめることができた。また、本年度、教師間でのアンケートを取った結果を基に、次年度は教師一人一人の力量を高めていくことはもちろん、教育力を向上させ、組織的に課題解決を図っていく必要があると考えた。

これまでの研究を踏まえ、新学習指導要領においても、「基礎的・基本的な知識や技能の確実な習得、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の育成、主体的に学習に取り組む態度の育成」の重要性が明記されていることを踏まえ、本校児童の実態を考えてみたところ、児童は、全体的に意欲的で、与えられたことや、指示されたことに対しては真面目に取り組む姿が見られた。

しかし、自ら進んで学習したり、活動したりする姿勢はまだまだ十分とは言えない。また、自分の思いや考えを話したり発表したりすることが苦手な児童が多く、国語科では「読み取る力」や「自分の考えや思いを書く力」、基礎的・基本的な知識・技能は概ね身につけているが、思考力・判断力・表現力等の力が弱いことが明らかとなっている。特に、考えの根拠や筋道を明らかにして表現すること、物事を多様な観点から考察する力や複数の情報をリンクさせて考察する力に課題がある。これらのことから、学習課題に対して自分の考えをもち、それをもとにして、その根拠や筋道を明確にして表現することで、相手に分かりやすく伝えることができ、主体的に課題解決することのできる児童を育てたいと考えるに至った。

3年目（2016年度）は、研究テーマとして、「表現する力」を新たに付け加えた。説明文の学習を通して自分たちが読み取ったことや本文の中にある文型や表現を使いながら、自ら説明する文を書くことにも取り組んだ。また、これまで継続的に実践してきた「話し合い活動」もより高いレベルで行うことができてきた。形式的に漠然と話し合うのではなく、個々の児童の考えを事前に確認したうえでメンバー編成を行い、話し合う目的を明確にし、それぞれに役割をもたせ、全員が意欲的に話し合いに参加できる環境を設定し、学習活動を進めることができた。

また、これまでの研究成果として、さまざまな資料を作成することができた。「各学年の研究の流れと教材一覧」では、各学年が1年間に取り組んできたさまざまな説明文教材を整理し、各学年、各学期ごとにひとつずつ指導案もデータとして残した。次年度以降、授業実践や教材研究を行う際の参考にしてみようことを目的としている。

また、「話し合いスキル 学年別習得事項」は、これまで学年ごとに指導してきた事柄を系統立てることにより、学年間のつながりをもたせ、効果的な指導に生かすことを目的として作成した。

最後に、「説明文 学年別 身につけさせたいスキル」については、実際に子どもたちにどのくらい身につけているかを検証することが重要であると考え、習得状況を客観的に見るための「到達度テスト」を全学年で実施した。その結果を集約し、分析することで、児童個々のスキルの習得状況を知ることができ、授業者の意識や授業の改善にフィードバックすることによって、来年度以降もより充実した国語教育の

実践を継続していきたいと考えている。

新学習指導要領において、言語活動を位置づけた授業の学習過程を改善するものとして、「アクティブラーニング」という用語・概念が示された。その後、この用語・概念は「主体的・対話的で深い学び」と言い換えられ、中教審の答申において次のように示されている。

国語教育の改善・充実を図るための「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けては、アクティブラーニングの視点に立った授業改善に取り組んでいくことが重要である。国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成することが求められていることから、言語活動を充実させ、子どもたちの学びの過程の更なる質の向上を図っていかなければならない。

したがって、子どもたち自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、他者とのコミュニケーションを通して、どのように捉えたかのかを問い直しながら考えを深めていけるような取り組みを、本校でも積極的に進めていきたいと考えている。

3. 4年目（2017年）の取り組み

今年度、国語科（説明文）の研究も4年目を迎えた。昨年度に引き続き、研究協力者として大阪大学の加藤先生に助言を頂きながら研究を進めている。特に今年度は、「勉強会」を積極的に実施している。この勉強会は、学年の先生と加藤先生という少人数での話し合いにより、教材研究や分析方法などの更なる深化を目的として行っている。

また、各学年の研究の進捗状況を互いに交流し、情報を共有することが大切であると考え、学期末には全体での交流会を実施し、学校全体での研究として進めている。

さらに、2学期末には、「低・中・高学年別 指導案検討会」を行い、加藤先生をはじめ、立命館小学校の永橋先生、高槻中・高等学校の竹田先生にもお越しいたごいて、さまざまな助言を頂き、学びを深めることができた。